キャラクター名
斬季

プレイヤー名

シンドローム	ノイマン バロール	ワークス	FHエージェントA	カヴァー	
オプショナル		年齢	21	性別	男
覚醒	渇望	衝動	殺戮	初期侵食率	41 %
出自		経験		邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	1	0			1
感覚	1		0			1
精神	5		0			5
社会	2		0			2

HP	27
行動値	7
(非装備時)	7
戦闘移動	12
全力移動	24

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	1		知覚			意志		-5	調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報： FH	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
-武器-		0				
イノセントブレード	白兵	7r+1	3	8		ﾀﾞｲｽ+2
キーンナイフ	白兵	5r+1	1	5		装甲-5
二刀流	白兵	7r+1		13		ﾀﾞｲｽ+2　装甲-5

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品	
-武器-	《ブラックマーケット》
イノセントブレード	
キーンナイフ	
ウェポンケース	
ウェポンケース	
-防具-	
-アイテム-	
千年石『REC/都築 京香』	
通常効果	
強化効果	
解毒剤	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
強化兵〈バーサーカー〉	P	N		
都築 京香	P 信頼	N 不安		
千年石	P 幸福感	N		
ｱﾛﾝ・ｱﾛﾌｧ・ﾎﾞﾝﾄﾞ-Type8-【ｼﾞｱﾎﾘｯｸ】	P 有為	N 不信感		
壱崎浅深(いちざきあさみ)	P 有為	N 不快感		
ﾊﾞﾝﾋﾞｴｯﾀ・ﾊﾞｽﾀｰﾊﾞｲﾝ"The Explode"	P 有為	N 無関心		
	P	N		

最大財産P: 6	残り財産P： 2

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
ブラックマーケット	2	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果： [常備化ﾎﾟｲﾝﾄ+[Lv×10]]【基本侵食値+2】								
武芸の達人	3	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果： 『選択〈白兵〉』[達成値+[Lv×3]]【暴走時は適用されない】【侵食でﾚﾍﾞﾙｱｯﾌﾟしない】【侵食率基本値+4】								
時の棺	1	10	ｵｰﾄ	視界	単体	自動	100%	
効果： 『相手の判定直前』[判定の強制失敗]【判定を行わない場合使用不可】【1ｼﾅﾘｵ1回】								
解放の宴	1	6	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ	至近	自身	自動	100%	
効果： [ﾗｳﾝﾄﾞ間判定ﾀﾞｲｽ+5][飛行状態]【1ｼﾅﾘｵLv回】								
時間凍結	1	5	ｲﾆｼｱﾁﾌﾞ	至近	自身	自動	80%	
効果： [ﾒｲﾝﾌﾟﾛｾｽを行う][行動済みでも可能][行動済みにならない]【他ｴﾌｪｸﾄと組み合わせ不可】【HP20消費】【1ｼﾅﾘｵ1回】								
マルチウェポン	1	3	ﾒｼﾞｬｰ	武器	-	対決	-	
効果： [同技能で扱う武器の攻撃力と効果を二つ合計して使用可能]【達成値-[5-Lv]（最大0）】								
コントロールソート	1	2	ﾒｼﾞｬｰ	武器	-	対決	-	
効果： 『選択〈白兵〉』[組み合わせた判定を【精神】で行える]								
神機妙算	1	3	ﾒｼﾞｬｰ	-	範囲（選択）	-	80%	
効果： [対象：範囲（選択）に変更]【1ｼｰﾝLv回】								
コンセントレイト	3	2	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	対決	-	
効果： 『指定/ﾊﾞﾛｰﾙ』[ｸﾘﾃｨｶﾙ-Lv]								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

ｻﾞﾝｷ
斬季

「京香の為なら俺は死んでもいい」

-経歴-

奇妙な瞳の色のせいで赤子の時に親に捨てられ、ある犯罪組織に拾われ戦闘訓練を施され捨て駒の兵士として育てられる。
生まれ持った才能か、教えられる殺しの技術を早い段階で完全に習得してしまう。
それが災いし、同年代の兵士達よりもかなり早く実戦投入される。

初陣にしては少々難易度の高いを任務を任され、それを見事に達成した事から、一線級の兵士として現場立たされるようになってしまう。
そうして数年の月日を経て齢12になった時、視界に異様なものが映る様になりだしていた。

紫色のモヤとしか表現しようのないそれは、常に形を変えながら様々な所で流れ、固まり、揺らめいていた。
しかし、この明らかな異常を伝えられる様な相手もおらず、結局は放置するしかなかった。
当然である。
いくら重宝されているといえど、視覚に異常をきたした、もしくは精神異常とでも捕えられたが最期、待っているのは処分一択である。
毀れた刃に価値は無く、鈍の為に砥石を削る様な真似はしない。
ここはそういう組織なのだ。
生きる為に殺して来たというのに、そんな最期は御免である。